虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です。

虹の架橋

第２６３号
平成29年７月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
森　貴子　さん
（大間々町５丁目）

半年前に本町通りにオープンした「街かどカフェ・にっこにっこ」の店長さん。森さんの明るく爽やかな笑顔に逢いたくてランチを食べに行ってます。

山田雅人かたりの世界
追悼『永六輔物語』

『人の死は一度だけではありません。最初の死は、医学的に死亡診断書が書かれたとき。でも死者を覚えている人がいる限り、その人の心の中で生き続けている。最後の死は、死者を覚えている人が誰もいなくなったとき。そう僕は思っています」（永六輔著・小学館「永六輔のお話し供養」より）

ながめ余興場ともご縁のあった永六輔さんが亡くなって七月七日で一年になります。永六輔忌有志の会では、この日に合わせて、永六輔さんとご縁の深かった山田雅人さんをお招きし、ひとり語り『永六輔物語』を開催します。

山田雅人さんの臨場感あふれるひとり語りは笑いと涙に溢れ、聴く人を感動の世界に誘います。

第２部では、大間々の板谷愛子さんや福田秀志さんたちが、ながめ余興場改修の頃の永六輔さんとの思い出話やエピソードを紹介。みどり市コーラスグループ「コール萌」の皆さんが永六輔さんが作詞した名曲を一緒に歌います。

「生きているということは 誰かに借りをつくること、生きていくということはその借りを返してゆくこと」と教えてくれた永六輔さんをみんなで偲びましょう。

7月7日（金）18時半
木戸銭：1,000円

小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）《263》

ＯＫバジは神様です

二十四年前にネパールの寒村に移住し、単身で支援活動を続けているＯＫバジこと垣見一雅さんは今年七十八歳。今、一時帰国し、支援団体の人たちと会い、報告の会を開いています。

「ＯＫバジを支援する会」は垣見さんを物心両面で支える支援団体として全国に先がけて桐生に誕生、これまでのカンパの累計は５５００万円になります。

今年は、ネパールから二人の校長先生も同行してきました。デヴラージュ先生は「バジは、多くのＮＧＯと違い、事務所や車を持たず、歩いて支援活動を続けているので支援金が無駄なく貧しい人たちのために活かされています。私たちはそれが全て日本からのお金だと知っているのでみんな日本人に感謝しています。バジの支援の判断は的確で、不満を言う人は誰もいません」

スンダル先生は「パルパ地方の人達はバジを神様のように慕っています。バジは辺境の村々の実情まで知り尽し、単なる支援ではなく、夢を持たせるような提案をしてくれるので、みんなが働く意欲を持つようになりました」と感謝を込めて語っていました。

今年の春、ＯＫバジからいただいた手紙には、「今年度は、女性グループに５万ルピーのジャガイモを植えて収入を図るプログラムを主に行いました。４倍、５倍の収入を得たグループもあれば、４千ルピーしかもうからなかったというグループもありましたが、それぞれのプログラムを通していろいろなことを学んだとのことです。もちろん私も学びました。支援決定には、自分の目で確かめ、支援後も村人たちとその結果を話し合い、根づいていることを確認し合っています」と書いてありました。

ジャガイモプロジェクトは定着し、儲かったグループから返ってきた貸付金は次の村の資金になり、ジャガイモプロジェクトの輪は「芋づる式？」に根づいているようです。

日本に滞在中は、一駅手前で降りて歩き、電車賃を節約したお金でコメを買って現地へのお土産にしているＯＫバジを私も神様のように尊敬しています。

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の芸術品《263》

本染めハッピ手ぬぐい

「注染」という伝統的技法で手ぬぐいを作る東京都伝統工芸士の村井米扶（よねすけ）さんは、一枚の手ぬぐいを折ってハッピの形にする方法を考案した人としても知られています。

このたび、村井さんにお願いして、ながめ黒子の会のハッピ手ぬぐいができあがりました。

ながめ余興場は今年創立八十年、改修二十年の節目を迎えました。七月七日の「山田雅人かたりの世界」でもながめ余興場で販売します。

通常は足利屋で販売中。お値段はハッピにちなんでハッピヤクエンです。（税込・八百円）

靖ちゃん日記

六月四日（日）

ながめ余興場で「富士路子浪曲の世界」を開催。予想以上のお客さんが入ってくれて嬉しかった。富士路子さんは日本浪曲協会の会長。三味線の伊丹秀敏さんは八十二歳の大ベテラン。大好きな「権太栗毛」も披露してくれた。武将熊谷直実の家来の権太が磐城の三春で主君が乗る駒に相応しい名馬を見つけ、五十里離れた武州まで一夜で帰るという人情話。富士路子さんの軽快な節と啖呵に合わせて絶妙のタイミングで三味線が入る。遠くから駆けてくる馬のひずめの音は三味線とは思えない躍動感があり、胸が躍った。

公演の後の打ち上げも盛り上った。去年も富士路子さんの付き人として来ていた弟子の富士実子さんと富士綾那さんの前に座った。嬉しくて胸が躍った。思わず歌いたくなった。「♪飲めと言われて素面に飲んだ　肩を抱かれてその気になった　よせばいいのに一目惚れ　浪花節だよ人生は」今日も飲みすぎた。

青梅をもぎて受取る白き腕

今年も我家の庭の梅の木にたくさんの実がなりました。

梅雨の晴れ間の朝、夫婦で梅の実を収穫するのもこの時期の恒例行事になっています。私が脚立に登り、大きそうな実をもいではバケツに入れ、いっぱいになると下に手渡します。あっという間にバケツ三杯の青々した梅を収穫しました。

毎年、季節の恵みをもたらす我家の梅の木や柿の木の樹齢は私の年齢より上。祖父母が食べた梅や柿を孫が食べる時代になります。家族の歴史を見守ってくれている庭の木々に感謝しています。

虹の架橋⇑検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第二六四号は八月一日（火）発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん